

助産師教育における修士課程修了前に受験した客観的臨床能力試験（OSCE）の影響と  
助産師 1 年目に直面する課題

Influence of the Objective Structural Clinical Examination (OSCE) Before Completion  
of the Master's Program in Midwifery Education and the Tasks of New Face Midwives

岡山 真理<sup>1)</sup> 森兼 眞理<sup>1)</sup> 山名 香奈美<sup>2)</sup> 乾 つぶら<sup>1)</sup> 五十嵐 稔子<sup>1)</sup>  
奈良県立医科大学大学院看護学研究科<sup>1)</sup> 元奈良県立医科大学大学院看護学研究科<sup>2)</sup>

Mari Okayama<sup>1)</sup> Mari Morikane<sup>1)</sup> Kanami Yamana<sup>2)</sup> Tsubura Inui<sup>1)</sup>  
Toshiko Igarashi<sup>1)</sup>

Nara Medical University Graduate School of Nursing<sup>1)</sup>

Former Nara Medical University Graduate School of Nursing<sup>2)</sup>

要旨

目的：A 大学院の助産師課程で修士課程修了前に実施している分娩介助の客観的臨床能力試験（Objective Structured Clinical Examination：以下、修了前 OSCE）に関して、修了生が病院就職後に感じた修了前 OSCE の影響と助産師 1 年目の課題を明らかにし、修了前 OSCE の中期的な評価を行うこととした。方法：A 大学院の修了生で、所属施設および本人から同意の得られた修了後 3 年以内の臨床助産師 10 名を対象に半構造化面接を実施した。得られたデータは質的帰納的に分析した。結果：修了前 OSCE の影響として 7 カテゴリー、15 サブカテゴリーが抽出され、修了前 OSCE の効果が示された一方、修了前 OSCE の受験が否定的な体験となったことも明らかになった。助産師 1 年目の課題には、学生時代には実習の対象とならなかった正常逸脱事例のほか、授乳支援も抽出された。考察：各大学院で行われているカリキュラムや実習内容によって、修士課程修了前に補強すべき内容を検討し修了前 OSCE を実施することは、大学院の助産師教育の質担保に寄与しうると考える。

キーワード：OSCE, 助産師教育, 修了前, 修士課程

Abstract

**Objective** : This study aimed to conduct a midterm assessment of the impact of the Objective Structural Clinical Examination (OSCE) carried out before the students completed their master's program in midwifery education (precompletion OSCE) and clarify the tasks of midwives in the first year after graduation. **Methods** : The participants included 10 clinical midwives who had completed their graduate studies. Semistructured interviews were conducted after obtaining consent from the midwives and their institutions. The data were analyzed qualitatively and inductively. **Results** :

Thus, 7 categories and 15 subcategories were extracted with respect to the impact of precompletion OSCE. The precompletion OSCE had positive effects and some negative outcomes. The tasks of new face midwives included cases that deviated from the normal cases and not the usual target of care when they were midwifery students. In addition, nursing support for breastfeeding was also one of their tasks. **Discussion** : Enhancing the quality of midwifery education in the master's program is possible by OSCE that includes relevant contents to be reinforced before program completion, despite the differences in the curriculum and practical training conducted in different graduate schools.

**Keywords** : Objective Structural Clinical Examination, Midwifery Education, Precompletion, Master's Program

## I. 研究の背景

客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination : OSCE) は 1975 年に英国で開発され(Harden et al., 1975), 以来, 臨床能力を評価する方法として日本国内では 1993 年に医学教育において導入され, 2000 年より看護学教育での導入報告がなされ始めた(鈴木ら, 2011)。A 大学院修士課程の助産師教育では, 1 年次に助産師教育を重点的に行い, 2 年次に修士論文作成に注力することから, 1 年次の病院実習から助産師として臨床で働くまで約半年から 1 年の実践ブランクを生じることが課題として挙げられる。そのブランクへの対策として, 修士課程修了前に分娩介助に関する OSCE (以下, 修了前 OSCE) を実施し, 臨床への適応をスムーズにすることをめざしている。

国内の助産師教育で行われている OSCE に関する導入報告は 2009 年ころより散見されるが, 大学院修士課程での OSCE に特化して検討された研究については, 研究代表者らが行った修了前 OSCE の短期的な効果とその影響要因に関する検討のみである(岡山ら, 2015)。本研究では, 修了前 OSCE の中期的な効果・影響を明らかにし, その実

施目的である臨床への適応に関する評価を行うべく, 修了生に対して就職後に感じた修了前 OSCE の影響と助産師 1 年目の課題について調査した。

修了前に受験した分娩介助 OSCE が助産師としての就職後にどのような影響を与えているか, また助産師として就職した修了生の 1 年目の課題を明らかにすることで, より効果的な修士課程修了前の OSCE を検討するための示唆を得たので報告する。

## II. 目的

- 1) 修士課程修了前に分娩介助 OSCE を受験したことによって, 修了生が就職後に感じた OSCE の影響を明らかにする。
- 2) 修了生が助産師 1 年目に課題となった実践内容について明らかにする。

## III. 方法

### 1. 研究デザイン

半構造化面接による質的帰納的研究とした。

### 2. 対象者

A 大学院の助産師課程修了生で, 本研究に同意の得られた大学院修了後 3 年以内の臨床助産師 10 名。就職後分娩介助を経験し

ていない修了生は除外した。

### 3. 調査期間

2018年8月～11月であった。

### 4. 調査方法

本研究の依頼文書を研究対象者に郵送するにあたり、A 大学院助産師課程修了から3年以内の修了生が就職する各施設の看護部長宛てに文書で研究依頼文を送付した。研究同意の得られた場合に当該施設に所属する修了生に対し、研究同意書を同封した研究依頼文書を渡していただき、研究同意書の返送があった修了生を研究参加者とした。インタビュー場所は対象者指定の個室またはプライバシーが保持できる場所を使用した。

インタビューはインタビューガイドを用いて半構造化面接を行い、面接予定時間は60分程度を予定した。

### 5. 調査内容

インタビュー内容は、就職後の助産実践の場面で、修了前 OSCE のことが蘇った、または影響を感じた場面についてとした。また、助産師1年目に直面した助産師としての課題について聴取した。インタビュー前に質問紙にて助産師臨床経験年数、就職後初めて分娩介助をした時期、助産師1年目での分娩介助件数、現在の就職先(助産師1年目で就職した)施設の規模について聴取した。

### 6. 修士課程修了前 OSCE の概要

本研究の対象となった修了前 OSCE では、①分娩介助技術の復習すること、②実習終了後からの実践プランクを解消し臨床への適応をスムーズにすることを目的に、分娩期(第1期～第3期)の OSCE が実施され

た。課題実施時間は30分で、分娩介助(児娩出あるいは胎盤娩出まで)を課題とした。

模擬産婦は出産経験のある一般人に依頼し、事前に実施要項とシナリオを渡して打ち合わせを行い、実施目的や模擬産婦の役割等の共通認識を図った。受験生には実施1週間前にオリエンテーションを行い、当日どちらの事例になるかは伏せた状態で事例2題を提示し、OSCE 当日までの1週間を自主練習期間として設定した。

### 7. データの分析

インタビュー内容は本研究の目的に沿った内容を抽出し、修士課程修了前 OSCE を受験した影響については質的帰納的に分析した。また修士課程修了生が1年目に課題となった実践内容を抽出、整理し、修士課程修了前 OSCE の改善点を考察した。データの分析は研究者間の意見が一致するまで行った。

### 8. 倫理的配慮

研究参加は自由意思であり、研究協力後の同意の撤回も可能であること、協力の可否による不利益は生じないこと、データの保管・破棄方法などを説明文書に明記して、書面にて説明し同意を得た。本研究は所属機関の医の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号1828)。

## IV. 研究の結果

### 1. 研究参加者の概要

本研究の参加者は10名であった。参加者の概要を表1に示す。修了後の経過年数の平均は1年10か月(標準偏差13.1か月)、インタビュー時間の平均は32.8分(標準偏差11.6分)であった。

表1 研究参加者の概要

ID	修了後の経過年数	就職後の分娩介助開始時期	インタビュー時間
A	5か月	12か月時	22分
B	5か月	3か月時	30分
C	1年4か月	12か月時	35分
F	1年4か月	9か月時	19分
E	1年5か月	2か月時	25分
D	1年6か月	1か月時	60分
G	2年4か月	7か月時	23分
H	3年4か月	2か月時	34分
I	3年4か月	4か月時	44分
J	3年5か月	8か月時	36分

## 2. 修士課程修了前 OSCE を受験した影響

修士課程修了前 OSCE を受験した影響として、表 2 のとおり 6 つのカテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを《》で示す。

### 1) 【修了前に OSCE をやってよかったと思う】

修了生は、<修了前 OSCE は、就職前の実践の復習の機会になった>と感じていた。さらには、就職後の分娩介助開始時期については表 1 のとおり最大で 12 か月を要しているが、<就職後、分娩介助のブランクがあってもうまく対応できた>など、修了前 OSCE の効果を感じていた。また、<模擬産婦の存在で実践力が発揮できた><前向きな気持ちで修了できた>経験から、修了前 OSCE を前向きに捉えている側面が明らかになった。

### 2) 【実際のお産との相違により実践力が発揮できない戸惑い】

OSCE は実際のお産や産婦ではないことでの限界があり、修了生も<実際のお産の感覚と違う OSCE では自分の思う分娩介助ができなかった><実際のお産と OSCE では臨場感に相違がある>と感じており、本来の実践力が発揮できなかったという思い

が明らかとなった。

### 3) 【自身の課題がみえる】

自身の実践力に自信のなかった修了生は、アセスメントやケアが合っているのか悩みながら OSCE を受験していた。また、《OSCE でうまくできた実感がなく修了し、悩ましい課題をもらって修了したという感覚があった》修了生は、<うまく対応できず、課題がのしかかった>と感じるなど、修了前 OSCE によって【自身の課題がみえる】経験をしていた。

### 4) 【学修消化不良がしこりとなって残る】

A 大学院の修了前 OSCE では、実施直後の模擬産婦や評価者からのフィードバックと、全受験者の実施終了後の模擬産婦からの講評の機会を設けている。しかし、《短時間での講評だけでは解決しない疑問があった》修了生がいることが明らかになった。また、<何が正解だったのかいまだにわからない>と、ある程度の分娩介助を経験しているインタビュー時点でも、どうすればよかったかわからない思いがあり、【学習消化不良がしこりとなって残る】ことが明らかになった。

### 5) 【臨床実践で支えになる】

修了生は就職後に、<OSCE で受けたフ

表2 修士課程修了前OSCEを受験した影響

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
修了前にOSCEをやったよかったと思う	修了前OSCEは、就職前の実践の復習の機会になった	修了前にOSCEを受験することで、分娩介助の復習の機会にはなっている
		修了前にOSCEがなかったら、もっと分娩介助技術を忘れていたと思う
		授業の資料や分娩介助手順を引っ張り出して復習した記憶がある
	模擬産婦の存在で実践力が発揮できた	調査、修士論文執筆、公聴会、国試受験という修士課程2年目のスケジュールを考えると、OSCEをするなら修了前しかないと思う
		実習での実践から修士課程修了まで約1年の実践ブランクがあり、さらに就職後も分娩介助開始までブランクがある
		就職後分娩介助をはじめた頃に、ブランクがあってもよく出来ていると褒めてもらった
前向きな気持ちで修了できた	模擬産婦の存在によって、実際のお産に近い感覚で臨めたと思う	
	模擬産婦からの要望や反応があるので、それに対応する形でOSCEを進められた	
	身内ではない模擬産婦だからこそ、気を使わずにOSCEに臨めた	
	模擬産婦からの肯定的なフィードバックで前向きに修了できたと実感した	
実際のお産との相違により実践力が発揮できない戸惑い	実際のお産とOSCEでは臨場感に相違がある	就職後分娩介助をはじめた頃に、ブランクがあってもよく出来ていると褒めてもらった
		実際本当のお産では緊張感がすごい
		絶対に安全なお産って決まっているなかでしかやらないと思っていた
	実際のお産の感覚と違うOSCEでは自分の思う分娩介助ができなかった	排胎・発露の感覚が、ファントムと実際とは違うと思う
		本当の産婦ではないので、模擬産婦の産痛表現では児頭が発露までしているとは思わなかった
自身の課題がみえる	うまく対応できず、課題がのしかかった	臨床では、絶対正常分娩しか担当しない、というわけにはいかない
		実際の分娩介助だったらもっと長い時間をかけて関わってアセスメントしたりケアをするが、OSCEは30分の短い時間で対応しなければいけない
	OSCEの学修消化不良があった	実際だったら産婦に関する申し送りや関係性を築く時間があるが、それが無いOSCEではどうすればよいかわからなかった
		OSCE中は、まだ生まれないだろうと腹をくくり、対応が遅れた
		OSCE事例の設定に惑わされて、うまく実践できなかった
学修消化不良がしこりとなって残る	OSCEで受けたフィードバックを実践で活かした	OSCEでは自分のアセスメントやケアに自信がなく、これで合ってるのかと悩みながら実施した
		OSCEでうまくできた実感がなく修了し、悩ましい課題をもらって修了したという感覚があった
	何が正解だったのかいまだにわからない	短時間での講評だけでは解決しない疑問があった
臨床実践で支えになる	OSCEで受けたフィードバックを実践で活かした	就職後、ある程度分娩介助を経験している今でも、OSCEのときどうすればよかったのかわからない
		模擬産婦から褒めてもらったケアを実践して、対象者から感謝される経験をした
	分娩介助のイメージトレーニングや実践の場でOSCEを思い出す	模擬産婦からのフィードバックが印象に残っている
		就職後に、対象者との関わりから、模擬産婦からのフィードバックの意味を実感することがあった
就職後までの影響は薄い	就職後の分娩介助のブランクによりOSCEの経験は薄れる	就職後初めて分娩介助をする前に、イメージトレーニングでOSCEを思い出した
		就職後もOSCEで復習した分娩介助の手順を意識して実践できた
	いまでもOSCEでの実践を振り返る	OSCEの事例と同じような事例を介助して、OSCEを思い出した
就職先の手順を覚えなおす	就職後の分娩介助のブランクによりOSCEの経験は薄れる	今思うと、清潔よりも赤ちゃんを安全に受けることを優先するとか、優先順位を考えればよかったなと思う
		働いていてOSCEを特別思い出すことはなかった
	就職先の手順を覚えなおす	断然、実習の方が印象に残っている
就職先の手順を覚えなおす	就職先の分娩介助手順が違って混乱した	就職してから分娩介助までの時期がもう少し早いと、よりOSCEの効果があったかもしれない
		OSCEで復習した分娩介助技術と就職先の方法が違っていて混乱した

ィードバックを実践で活かした>ことやく分娩介助のイメージトレーニングや実践の場で OSCE を思い出す>経験をしていた。またくいまでも OSCE での実践を振り返る>ことがあるなど、修了前 OSCE での経験が【臨床実践で支えになる】ことが明らかになった。

6) 【就職後までの影響は薄い】

修了生の実践については、就職後少なからず分娩介助のブランクを生じるため、<就職後の分娩介助のブランクにより OSCE の経験は薄れる>と感じており、<臨床で OSCE は思い出さなかった>修了生がいるなど、【就職後までの影響は薄い】という側面が明らかになった。

7) 【就職先の手順を覚えなおす】

修了生が修了前 OSCE で実践した分娩介助手順は養成期間中に修得したベーシックな手順であるため、就職先の分娩介助手順が異なることは十分に考えられる。修了生が就職後に【就職先の手順を覚えなおす】必

要があることが明らかになった。

3. カテゴリーと時系列

カテゴリー間の関係性を、OSCE の練習期間、OSCE 当日、就職後の時系列に配置して図に示す。

修了前 OSCE は練習期間と受験当日のみならず、助産師として就職後も修了生に影響していたことが明らかとなった。【修了前に OSCE をやってよかったと思う】ポジティブな影響と、【学修消化不良がしこりとなって残る】ネガティブな影響が、OSCE 受験から就職後にも続けて存在することがわかった。

4. 修士課程修了後 1 年目に課題となった実践内容

修士課程を修了した助産師が就職後に直面した課題のうち、具体的な実践内容について表 3 に示す。助産師学生時代には実習で対象者とならずに、受け持ち経験がなかった項目として、正常逸脱事例や無痛分娩

練習期間	OSCE 当日	就職後
<b>【修了前に OSCE をやってよかったと思う】</b>		
<修了前 OSCE は、就職前の実践の復習の機会になった>	<OSCE で実践力が発揮できた> <前向きな気持ちで修了できた>	<就職後、分娩介助のブランクがあってもうまく対応できた>
	<b>【実際のお産との相違により実践力が発揮できない戸惑い】</b>	<b>【臨床実践で支えになる】</b>
	<実際のお産と OSCE では臨場感に相違がある> <OSCE では自分の思う分娩介助ができなかった>	<OSCE で受けたフィードバックを実践で活かした> <分娩介助のイメージトレーニングや実践の場で OSCE を思い出す> <いまでも OSCE での実践を振り返る>
	<b>【自身の課題がみえる】</b>	<b>【就職後までの影響は薄い】</b>
	<うまく対応できず、課題がのしかかった>	<就職後の分娩介助のブランクにより OSCE の経験は薄れる> <臨床で OSCE は思い出さなかった>
	<b>【学修消化不良がしこりとなって残る】</b>	
	<OSCE で学習消化不良があった>	<何が正解だったかいまだにわからない>
		<b>【就職先の手順を覚え直す】</b>
		<分娩介助手順が就職先の方法と違って混乱した>

図. カテゴリーと時系列の関係

介助, 婦人科看護に関する項目があった。一方, 助産学実習で経験しているが, 課題として挙げられたのは, 授乳支援とハイリスク妊産婦に関する項目であった。

表3 修了生の就職後1年目の課題

乳房の観察と授乳支援
分娩第1期のケア(アセスメントと陣痛促進)
切迫早産の観察とケア
分娩時の異常出血の対応
新生児の観察(正常逸脱の判断)とケア
ハイリスク妊産婦の観察とケア
婦人科看護
無痛分娩の介助
グリーフケア

## V. 考察

### 1. 修士課程修了前 OSCE を受験した影響

#### 1) 修士課程修了前に OSCE を実施する効果

本研究の結果から, OSCE を実施することで分娩介助の復習となり, 事前の自主学習によって学生同士の研鑽の機会となっていることが明らかになった。このことは, 勝田らの研究結果でも OSCE 実施の効果として報告されており, 本研究の結果を支持するものであると考える(勝田ら, 2016)。

他方, 本研究の参加者となった大学院の修了生は, その養成期間とカリキュラムの特徴から, 実習での実践終了から修士課程修了まで半年から約 1 年の実践ブランクが生じているのが現状である。本研究の結果から, その実践ブランクのうち特に分娩介助に至っては, 経験するまでに就職後もさらにブランクを生じる傾向にあることが明らかになった。以上のことから, 【修了前に OSCE をやってよかったと思う】というカテゴリーは, 修士課程の助産師教育課程だからこそ抽出されたものであり, さらには修士課程修了前に OSCE を実施する効果と

して挙げられると考える。修士課程の助産師教育は日本国内で開始されてから約 18 年経過したところであり, その現状について明らかにされた調査はまだ少ない。本研究によって, 修士課程のカリキュラムの特徴やそれに伴って生じる実践ブランクという修了生の課題, そして修了前に OSCE を実施する効果を初めて明らかにできたと考える。

また, OSCE における模擬患者 (模擬産婦) については, 専門知識を持たない一般人を設定することとされている(渡邊ら, 2011)。本田らは模擬患者の効果について, 看護のリアリティを疑似体験するとともに, 模擬患者からのフィードバックは学生にとって患者の気持ちや視点を知る貴重な機会となり, 患者側にたったまなざしへの転換をもたらす, と述べている(本田ら, 2009)。本研究の結果においても, 修了生は<模擬産婦の存在で実践力が発揮できた>ことを実感していた。そして, <OSCE で受けたフィードバックを実践で活かした>ことにより, 修了前 OSCE が【臨床実践で支えになる】経験をしていることが明らかになった。しかし, 模擬患者からのフィードバックの効果が報告されている一方, 多くの教育機関では, 受験者数が多数であるとの理由から OSCE 実施後に模擬患者からのフィードバックは行われていないともいわれている(鈴木ら, 2011)。修士課程の助産師教育においては学生が少人数であること, 模擬産婦からのフィードバックが修了生に与える効果を考えると, 修士課程の助産師教育だからこそ, OSCE では模擬産婦からのフィードバックを重要視して行う必要があると考える。

そして, 【自身の課題がみえる】ことも、

修了前 OSCE を受験したことで得られる効果であると考えられる。A 大学院の修了前 OSCE の目的の一つに、「自己の助産実践能力や課題を明確にし、修了前に一定の技術を定着させることができること」が掲げられているが、修了前に OSCE を実施することは当該目的に合致した方法であると評価できる。

## 2) 修士課程修了前に OSCE を受験した修了生の否定的な体験

本研究の結果から、修士課程修了前に OSCE を受験した影響として、【実際のお産との相違により実践力が発揮できない戸惑い】【学修消化不良がしこりとなって残る】という修了生の否定的な体験が明らかになった。この結果は、OSCE が伝統的な試験方法に比べ効果的であった一方、受験者にとっては精神的負担の強い試験でもあったことを明らかにした先行研究の結果 (Barry et al., 2012) を支持するものである。＜実際のお産と OSCE では臨場感に相違がある＞あるいは＜実際のお産の感覚と違う OSCE では自分の思う分娩介助ができなかった＞修了生がいることが明らかとなったため、OSCE で提示する課題の内容のみならず、想定される受験者の疑問や戸惑いを含めて受験者へオリエンテーションをするなど、運営方法については改善の余地があると考えられる。

## 2. 修士課程修了後 1 年目に直面した課題と修了前 OSCE の改善点

修士課程を修了した助産師が 1 年目に直面した課題として、乳房の観察と授乳支援やハイリスク妊産婦の観察とケアについて抽出されたことは、修士課程 2 年間の助産師教育においてもその実技時間が十分でな

いことを示唆している。特に産褥期の看護については、就職後、分娩介助に比してすぐに担当する傾向にあるといえ、授乳支援は就職後すぐに求められる実践力のため、修士課程修了前の実践力を補強することを目的に、授乳支援に関する OSCE を検討することも有効であると考えられる。

他方、全国助産師教育協議会は「大学院における助産師教育のモデル・コアカリキュラム 2018」のなかで、大学院教育修了者に求められる資質・能力として、ローリスク妊産婦・新生児とその家族の診断とケアと並んで、ハイリスク妊産婦・新生児とその家族の診断とケアについても必須であると明記している (全国助産師教育協議会, 2018)。このことから、修士課程修了時にはその実践能力の質担保のために、実習で優先されたローリスク妊産婦・新生児への看護のみならず、ハイリスク妊産婦・新生児、あるいは緊急時の対応等についての能力を補う必要性があり、その一つの方法として修了前の OSCE が有効である可能性がある。

## VI. 本研究の限界

本研究は 1 大学院における助産師課程での修了前 OSCE の影響を調査したものであり、そのカリキュラムや実習内容等が異なる大学院では本研究の結果は適用されない場合がある。しかし、全国助産師教育協議会では助産師教育における質保証として OSCE 導入の可能性を検討されるなど、助産師教育において OSCE の導入は今後加速すると考えられるため、本研究の結果は大学院修士課程の助産師教育における OSCE の可能性を検討する基礎資料の一つとなり得る。

## VII. 結論

1. 修士課程修了前 OSCE を受験した影響として、修士課程修了前に受験したからこそ感じた OSCE の効果と、修了生の否定的体験が明らかとなった。
2. 修士課程修了後の助産師が1年目に直面する課題には、学生時代に対象とならない正常逸脱事例の対応と、実習で経験している乳房の観察・授乳支援等が含まれた。

## 謝辞

本研究の参加者の皆様には、大変お忙しいなかインタビュー調査にご協力賜り、深謝申し上げます。

なお、本論文内容に関連する利益相反事項はない。

## 引用文献

- Barry M, Noonan M, Bradshaw C, et al. (2012) : An exploration of student midwives' experiences of the Objective Structured Clinical Examination assessment process . Nurse Educ Today, 32(6) : 690-694.
- Harden R.M, Stevenson M, Wilson W, et al. (1975) : Assessment of Clinical Competence using Objective Structured Clinical Examination. British medical journal, 1 : 447-451.
- 本田多美枝, 上村朋子(2009) : 看護基礎教育における模擬患者参加型教育方法の実態に関する文献的考察—教育の特徴および効果, 課題に着目して—. 日本赤十字九州国際看護大学 IRR, 7 : 67-77.
- 伊藤美栄, 和泉美枝, 藤井ひろみ 他(2019) :

助産師教育課程修了時の分娩期の実践能力を評価する OSCE の検討～卒業前の助産学生へのトライアル～. 日本助産学会誌, 33(2) : 200-212.

勝田真由美, 戸田由美子, 鈴木香苗 他 (2016) : 4年生大学卒業生による在学中の OSCE の効果と課題—入職1年目の看護師のグループインタビューより—. Japanese Red Cross Hiroshima Coll.Nurs, 16 : 47-55.

小西美里(2013) : 日本の看護教育における OSCE の現状と課題に関する文献レビュー. 上武大学看護学部紀要,8(1):1-8.

岡山真理, 森兼真理, 山名香奈美 他(2015) : 修士課程における助産師教育での修了前客観的臨床能力試験(OSCE)を受験する学生の行動に影響を与える要因と効果的な修了前 OSCE の検討. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要,11:67-76.

鈴木富雄, 阿部恵子(2011) : よくわかる医療面接と模擬患者. 愛知, 名古屋大学出版会.

Ward, H. & Barratt, J. /中村恵子監訳 (2014) : 高度看護 OSCE. へるす出版, 129-140.

渡邊由加利, 工藤京子, 山本勝則 他(2011) : OSCE における模擬患者への支援と模擬患者によるフィードバック. 看護展望, 36(6) : 27-31.

全国助産師教育協議会(2018) : 大学院における助産師教育のモデル・コアカリキュラム.

[http://www.zenjomid.org/member\\_only/report\\_committee/img/core-curriculum/grad-curriculum-2018.pdf?\\_=20181122](http://www.zenjomid.org/member_only/report_committee/img/core-curriculum/grad-curriculum-2018.pdf?_=20181122) (会員専用ページ) (accessed 2019-3-14)